

## シドモアさんと百年の夢

文 神尾 りさ

絵 西 由美子

エライザ・シドモアさんには、長い間思いつづけている、大きな夢がありました。

それはシドモアさんが、ふるさとのアメリカをはなれて、日本でくらしていたときのこと。春になると、まちじゅうをピンク色にそめる桜のはな花のうつくしさに、心をうばわれたのでした。そしていつしかアメリカにも、日本でみた桜並木をつくりたいと思うようになったのです。そこで、アメリカの首都ワシントンDCに、桜の木を植える計画をたてることにしました。

しかし、ワシントンで桜の花を咲かせるためには、たくさんのお金が必要でした。

シドモアさんは、友達に相談しました。公園をかんりするえらい人たちにも、たくさん手紙を書きました。



でも、誰も助けに来てくれません。そんな夢はかなわないと笑われることもありました。シドモアさんは、何度もあきらめそうになりました。でも、いつかワシントンの街が日本の桜の花でいっぱいになったら、どんなにすばらしいだろうと思うと、あきらめることができませんでした。

そして、二十四年の年月がながれていきました。

ときは一九〇九年のこと。アメリカで新しく、第二十七代目の大統領が誕生しました。ウィリアム・タフト大統領です。そして奥さんのヘレン・タフト夫人には、ホワイトハウスがあるワシントンの街を、美しくするという仕事を与えられました。

そのことを知ったシドモアさんは、あることを思いつきました。タフト夫人に手紙を書くことにしたのです。日本にある美しい桜を植えて、ワシントンの街をきれいにしてはどうでしょうかと伝えました。



手紙をだしてから、二日後のことです。タフト夫人から、シドモアさんに返事がとどきました。

「ワシントンに桜の木を植えるというのは、すばらしい考えだと思います。街の中に桜並木をつくるのはどうかしら。あなたの意見をきかせてください。ヘレン・タフトより」

シドモアさんの長年の思いは、そのときたまたまワシントンを訪れていた、たかみねじょうきち高峰讓吉博士の耳にもつたわりました。高峰博士は、日本からアメリカにわたり、アドレナリンという薬を開発した化学者です。高峰博士は、二千本の桜を運ぶために、協力することにしました。



そしてもう一人、ワシントンに桜の花をさかせるために、助けてくれる人があらわれました。

アメリカの農務省ではたらいっていた、デイビッド・フェアチャイルド博士です。博士は、それまでに世界中を旅して、めずらしい植物をみつければ、アメリカに持ち帰って植えていました。日本の桜のとりこになり、自分の家の庭に桜の木を植えて、育て方を研究していたのです。日本とは土も気候もちがうアメリカで、美しい桜の花を咲かせるために、何度も失敗をくりかえして、ついに成功したのでした。



フェアチャイルド博士の住む地元には、三百本の桜の木が植えられました。またワシントンにある学校の校庭にも、桜の木がプレゼントされました。その式典には、シドモアさんも参加しました。フェアチャイルド博士も、日本から桜をはこぶために、手伝ってくれることになりました。

こうして、シドモアさんの長年の夢が、いよいよ現実のものになるうとしていました。

ある日、尾崎行雄市長おみきゆうおから、アメリカに正式な手紙がとどきました。

「東京とワシントンの友好の記念に、二千本の桜を贈ります。」

そして、一九一〇年一月六日。日本の横浜港を出発した二千本の桜の木が、ワシントンに到着しました。

ところが、大問題が発生しました。

送られてきた桜の木が、日本からアメリカまでの長い船旅の間に、害虫にやられてしまっていたのです。農務省の専門家たちが相談した結果、ほとんどの木が燃やされることになりました。

すぐに桜の花が咲くようにと、苗木ではなく成長した木を送ったことが、失敗の原因でした。東京の尾崎行雄市長には、アメリカからおわびの手紙がとどきま



した。

それでもまだ、シドモアさんの夢は消えませんでした。その夢は日本とアメリカで、たくさんの人の心を動かし、今では皆の夢となりました。一度の失敗ではあきらめられないほど、大きく、大きくふくらんでいたのです。

皆で力をあわせて、もう一度日本から桜をおくることになりました。今度は前よりも多い、三千二十本の桜です。

前と同じ失敗をしないように、尾崎市長の友人で、植物の

かわせしゅんたろう

専門家の河瀬春太郎さんがていねいに選んだ苗木がおくられることになりました。東京の荒川近くの桜と、兵庫県伊丹市の桜を接ぎ木して、強い桜が育てられました。皆が心をひとつにして、アメリカに運ぶための準備をしました。

そして、横浜港を出発したあわ丸という船にのって、二度目の桜がアメリカに運ばれました。ワシントンに到着した三千二十本の桜には、害虫もなく、これまで誰もみたことがないほど、すばらしい木でした。



一九一二年、三月二七日。  
ヘレン・タフト大統領夫人と、珍田大使  
夫人が、ワシントンDCのタイダル池の  
そばに最初の桜の木を植えました。

続けてシドモアさんも、桜の木を植えました。

日本から送られた桜は、ワシントンDCのほか、ニューヨ  
ークなどにも植えられ、日本とアメリカの友情と絆のシンボ  
ルとなりました。

アメリカ人が桜の美しさに見とれるのをみて、シドモアさ  
んはほほえみました。最初に日本で目にした、日本人が桜の  
花を愛でる様子を思い出していたのです。シドモアさんの強  
い思いと、失敗してもあきらめない心が、海をこえたアメリ  
カの地に日本の桜を咲かせたのでした。毎年春になると、お  
花見をするために人々があつまり、ワシン  
トンで桜祭りが開かれるようになりました。



それから百年の月日が流れました。

日本から贈られた桜は、ワシントンに春の訪れを知らせるために、なくてはならないものとなりました。街中がピンク色にそまると、世界中から人々が集まってきました。そして、ワシントンの桜が咲いたというニュースは、毎年日本にも届けられます。

二〇一二年、三月二十七日。

オバマ大統領夫人と、藤崎大使夫人、そして地元の子供たちが、百年続いてきた日本とアメリカの絆がこれからも続くようにと願って、ワシントンDCのポトマック川のそばに、新たに桜の木を植えました。

シドモアさんの夢は、百年たっても、そこに生きる人々によって大切に守られています。

